

《第 1 問解説》

1. 現金の実際残高が帳簿残高よりも多かったため、現金過不足が発生した時に以下の仕訳がされています。

(借) 現 金 8,500 (貸) 現金過不足 8,500

このうち¥7,000 は受取手数料の記入漏れであったため受取手数料勘定に振り替え、残額の¥1,500 については、問題文の指示により雑益勘定で処理します。

2. 訂正仕訳の問題です。解答手順は次のとおりです。

- ① 誤った仕訳の逆仕訳をしてその仕訳を取消す
- ② 正しい仕訳をする。
- ③ ①と②の仕訳を合わせたものが解答の訂正仕訳となります。

〈誤った仕訳の逆仕訳〉

(借) 売 上 56,000 (貸) 売 掛 金 56,000

〈正しい仕訳〉

(借) 売 掛 金 65,000 (貸) 売 上 65,000

〈訂正仕訳〉

(借) 売 上 ~~56,000~~ (貸) 売 掛 金 ~~56,000~~

(借) 売 掛 金 ~~65,000~~ (貸) 売 上 ~~65,000~~

↓ 売上勘定の金額・売掛金勘定の金額をそれぞれ相殺する。

(借) 売 掛 金 9,000 (貸) 売 上 9,000

3. 商品仕入れのために支払った手付金¥30,000 については、その支払いをしたときに前払金勘定の借方に記入されています。実際に商品を仕入れたときは、前払金勘定の貸方に記入して相殺します。残額の¥70,000 は掛けとしたため、買掛金勘定の貸方に記入します。

4. 固定資産を売却したときは、間接法の場合、売却した固定資産の取得原価を貸方に、取得日から売却日までの減価償却合計を借方に計上します。取得原価から減価償却合計を控除した金額である帳簿価額と売却価額との差額を固定資産売却損または固定資産売却益で処理します。

なお、本問の場合、固定資産は期首に売却しているため、当期分の減価償却費を計上する必要はありません。

〈帳簿価額の計算〉

$$¥200,000 - ¥90,000 = ¥110,000$$

〈固定資産売却損益の計算〉

$$¥30,000 - ¥110,000 = \triangle ¥80,000 \text{ (固定資産売却損)}$$

5. 従業員に支払った¥50,000 については、出張旅費として支払ったものです。しかし、その出張旅費の正確な金額は従業員が帰社するまで分からないため、旅費交通費勘定には記帳せず、仮払金勘定に記帳します。

《第 2 問解説》

〈補助簿の名称〉

摘要欄「売掛金回収」「商品売上」、てん末欄に「取立」「裏書譲渡」とあることから、受取手形記入帳であることが分かります。

受取手形記入帳の記入においては、約束手形・為替手形を受け取ったときは、てん末欄より左側の欄に記入します。また、手形代金を取り立てたとき・手形を裏書譲渡したとき・手形を割り引いたときは、てん末欄に記入します。

〈各日付の仕訳〉

- 1月5日 摘要欄に「売掛金回収」とあり、手形種類欄に「為」とあるため、売掛金の回収として為替手形を受け取った取引であることが分かります。
- 1月9日 摘要欄に「商品売上」とあり、手形種類欄に「約」とあるため、商品売上代金として約束手形を受け取った取引であることが分かります。
- 2月5日 てん末欄に「取立」とあることから、手形代金を取り立てた取引であることが分かります。
- 2月9日 てん末欄に「裏書譲渡」とあり、問題文の最後に「2月9日は、商品¥500,000の仕入れを行い、代金の不足額は小切手を振り出して支払っている。」とあるため、商品¥500,000を仕入れ、代金のうち¥350,000を手形を裏書譲渡して支払い、残額の¥150,000については当座預金で支払った取引であることが分かります。

《第 3 問解説》

平成18年11月1日現在の残高試算表と平成18年11月中の取引の資料から、平成18年11月30日現在の残高試算表を作成する問題です。

解答の手順としては、資料の〔平成18年11月中の取引〕を仕訳して、その金額と平成18年11月1日現在における残高試算表の金額を集計して各勘定科目の残高を算定します。

〔平成18年11月中の取引〕

2日	(借)	仕	入	31,000	(貸)	買	掛	金	30,000
							当	座	預
								金	1,000
6日	(借)	現	金	30,000	(貸)	売		上	42,000
		売	掛	金	12,000				
		発	送	費	800		当	座	預
								金	800
7日	(借)	受	取	手	形	20,000	(貸)	売	掛
								金	20,000
8日	(借)	売		上	2,000	(貸)	売	掛	金
									2,000
9日	(借)	当	座	預	金	10,000	(貸)	売	買
									目的
									有
									価
									証
									券
									16,900
		未	収	金	8,000				有
									価
									証
									券
									売
									却
									益
									1,100
10日	(借)	仕	入	45,000	(貸)	受	取	手	形
									20,000
							買	掛	金
									25,000

第115回 解説 一級商簿記3級

13日	(借)	買掛金	1,500	(貸)	仕入	1,500
14日	(借)	受取手形	30,000	(貸)	売上	52,000
		売掛金	22,000			
17日	(借)	前払金	2,000	(貸)	現金	2,000
20日	(借)	売買目的有価証券	13,400	(貸)	当座預金	13,400
21日	(借)	仕入	20,000	(貸)	前払金	2,000
					現金	18,000
22日	(借)	当座預金	30,000	(貸)	前受金	30,000
24日	(借)	給料	15,000	(貸)	現金	15,000
27日	(借)	買掛金	35,000	(貸)	売掛金	35,000
28日	(借)	借入金	40,000	(貸)	当座預金	40,600
		支払利息	600			
29日	(借)	当座預金	50,000	(貸)	受取手形	50,000
30日	(借)	支払手形	80,000	(貸)	当座預金	80,000

《第4問解説》

5伝票制にもとづく伝票から取引を推定し、3伝票制にもとづいた伝票を記入する問題です。

解答の手順としては、問題文の5伝票制にもとづく伝票から仕訳を推定し、この仕訳にもとづいて3伝票制にもとづく伝票を記入します。

＜5伝票制にもとづく伝票からの仕訳の推定＞

5伝票制における売上取引は、すべて掛により売り上げたものと仮定して、売上傳票に記入します。このため、一部現金による売上であっても、まずすべて掛により売り上げたものと仮定し、それからただちに掛代金の回収があったものとして、この掛代金の回収について入金伝票または振替伝票に記入します。

売上傳票からの仕訳と入金伝票からの仕訳を合わせると、この取引における仕訳となります。

(売上傳票からの仕訳)

(借) 売掛金 200,000 (貸) 売上 200,000

(入金伝票からの仕訳)

(借) 現金 50,000 (貸) 売掛金 50,000

(売上傳票からの仕訳と入金伝票からの仕訳を合わせた仕訳)

(借) 現金 50,000 (貸) 売上 200,000
 売掛金 150,000

＜3伝票制にもとづく伝票の記入＞

3伝票制の場合における一部現金取引については、(1)取引を分解して伝票に記入する方法と(2)取引を擬制して伝票に記入する方法とがあり、本問の場合、それぞれの方法により伝票を記入することになります。

第115回 解説 一日商簿記3級一

(1) 取引を分解して伝票に記入する方法

商品の売上代金¥200,000のうち¥50,000は現金で受け取り、残額は掛けとしているため、仕訳を次のように分解して、入金伝票および振替伝票に記入します。

(借) 現	金	50,000	(貸) 売	上	50,000	
(借) 売	掛	金	150,000	(貸) 売	上	150,000

(2) 取引を擬制して伝票に記入する方法

商品の売上代金¥200,000をいったん掛けで売り上げたものとし、その後、掛代金¥50,000を現金で受け取ったものとして、入金伝票および振替伝票に記入します。

(借) 売	掛	金	200,000	(貸) 売	上	200,000
(借) 現	金	50,000	(貸) 売	掛	金	50,000

《第5問解説》

精算表(順進)の問題です。

決算日までに判明した未記帳事項及び期末整理事項などに基づいて、修正仕訳を修正記入欄に記入します。

(1) 決算日までに判明した未記帳事項

1. 手形の割引の記帳漏れ

(借) 当座借越	81,000	(貸) 受取手形	270,000
当座預金	180,000		
手形売却損	9,000		

当座借越が¥81,000あるため、預け入れた¥261,000のうち¥81,000を当座借越勘定で処理し、残額を当座預金勘定で処理します。

2. 備品購入の記帳漏れ

(借) 備品	300,000	(貸) 仮払金	100,000
		未払金	200,000

3. 商品の私用消費の記帳漏れ

(借) 資本金	70,000	(貸) 仕入	70,000
---------	--------	--------	--------

店主が私用で商品を購入したため、資本金勘定の借方に記帳します。また、商品については、期中は仕入勘定で処理しているため、仕入勘定の貸方に記帳します。

(2) 期末整理事項

1. 貸倒引当金の設定

(借) 貸倒引当金繰入	17,000	(貸) 貸倒引当金	17,000
-------------	--------	-----------	--------

〈貸倒引当金の計算〉

当期要設定額 = {受取手形(¥520,000 - ¥270,000) + 売掛金(¥450,000)} × 3% = ¥21,000

当期繰入額 = ¥21,000 - ¥4,000(残高試算表の残高) = ¥17,000

2. 有価証券の評価替え

(借) 売買目的有価証券 60,000 (貸) 有価証券評価益 60,000

売買目的有価証券の評価益の計算

$¥987,000$ (期末時価) $- ¥927,000$ (残高試算表の金額) $= ¥60,000$

3. 売上原価の算定

(借) 仕 入 110,000 (貸) 繰越商品 110,000

(借) 繰越商品 130,000 (貸) 仕 入 130,000

4. 減価償却費の計上

(借) 減 価 償 却 費 162,000 (貸) 建物減価償却累計額 85,500

備品減価償却累計額 76,500

建物の減価償却費の計算(定額法)

$(¥1,900,000 - ¥1,900,000 \times 10\%) \div 20 \text{年} = ¥85,500$

備品の減価償却費の計算(定額法)

① 従来分

$(¥400,000 - ¥400,000 \times 10\%) \div 5 \text{年} = ¥72,000$

② 新規分

$(¥300,000 - ¥300,000 \times 10\%) \div 5 \text{年} \times 1 \text{ヶ月} / 12 \text{ヶ月} = ¥4,500$

③ 合計

$¥72,000 + ¥4,500 = ¥76,500$

5. 未収利息

(借) 未 収 利 息 44,000 (貸) 受 取 利 息 44,000

貸付金の利息は、全額返済時に受け取ることとなっているので、平成 18 年 2 月～平成 18 年 12 月の 11 ヶ月分を当期の未収利息として計上します。

$¥960,000 \times 5\% \times 11 \text{ヶ月} / 12 \text{ヶ月} = ¥44,000$

6. 前払保険料

(借) 前 払 保 険 料 24,000 (貸) 保 険 料 24,000

試算表の保険料勘定の金額は、期首の再振替仕訳分である平成 18 年 1 月～4 月の 4 ヶ月分と平成 18 年 5 月 1 日に支払った平成 18 年 5 月～平成 19 年 4 月の 12 ヶ月分の合計 16 ヶ月分金額です。

よって、平成 19 年 1 月～平成 19 年 4 月の 4 ヶ月分を前払保険料として計上します。

$¥96,000 \div 16 \text{ヶ月} \times 4 \text{ヶ月} = ¥24,000$

7. 消耗品

(借) 消 耗 品 8,000 (貸) 消 耗 品 費 8,000

残高試算表から期中は消耗品費勘定(費用)で処理されていたことが分かります。よって、決算整理仕訳では、未消費分を消耗品勘定(資産)に振替えることになります。

第115回 解 説 一 日 商 簿 記 3 級 一

8. 前受家賃

(借) 受 取 家 賃 6,000 (貸) 前 受 家 賃 6,000

試算表の受取家賃勘定の金額は、期首の再振替仕訳分である平成18年1月の1ヶ月分、平成18年2月1日に支払った平成18年2月～平成18年7月の6ヶ月分、平成18年8月1日に支払った平成18年8月～平成19年1月の6ヶ月分の合計13ヶ月分のご金額です。よって、平成19年1月の1ヶ月分を前受家賃として計上します。

$$¥78,000 \div 13 \text{ヶ月} \times 1 \text{ヶ月} = ¥6,000$$